

第20回上智大学国連Weeks

AIや平和構築など多彩なテーマで国連デーに合わせて開催

10月7日から24日まで「第20回上智大学国連Weeks」が開催された。「国連の活動を通じて世界と私たちの未来を考える」をコンセプトに、今の世界が直面する課題を取り上げた。11月11日にはポスト企画も行われ、全8件の企画に大勢の参加者が集った。

ハレスチナ難民の若者から見たガザ地区の今
—日本・UNRWA70周年—

7日のイベントは、翻訳家の活動について説明があった。そして、塚本氏の進行役を務めた。はじめに国際協力人材育成センター所長の植木安弘グローバル・スタディーズ研究科教授が挨拶し、ハレスチナ難民の歴史的背景と、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)を紹介した。



3人のガザの中学生が夢などを発表

生3人(Tama Y.A.Owdaさん、Fadi S.M.Alyanさん、Janan Y.Mabu Younisさん)が紹介され、それぞれが将来の夢や趣味などについて発表した。3人は学生議会の代表を務めており、学校内やコミュニティの問題をUNRWAの政策決定者に伝える役目を持っている。これらの活動を続ける中で責任感やリーダーシップを学んできた。いずれもUNRWAにより質の高い教育を受けられていることに感謝の言葉を述べた中で、「教育は酸欠の

10日、2023年3月1日付けで国連大学学長に就任したチリツィ・マルワラ

国連大学学長特別講演 「AIとそのガバナンスについて」

AIの可能性について語るマルワラ学長



理由として、膨大なデータが蓄積されたことと、コンピュータの性能が向上したことの2点を挙げた。そして、国連が掲げるSDGsにどうAIが対応できるかを解説。今後の課題に倫理や法規制、セキュリティなどを挙げ、AIとの向き合い方としてガバナンス強化の必要性を説いた。

理工系の複合知を世界に

16日に理工学部との共同で行われたシンポジウムでは、持続可能な社会での「複合知」「STEAM教育」の国際展開の意義について議論。理工学部英語コースの今後のあり方も模索する機会として、理工学部機能創造理工学部の宮武昌史教授と足立匡教授が企画した。



分らしい理系進路の見つけ方」と題し講演。国内外での活動の紹介や、本学在学時の学びが自身のキャリアにどのように生きたのかを語った。そして「自分らしい理系進路を実現してほしい」と、参加した生徒・学生たちにエールを送った。

公正性と包摂性をめぐる教育の新たな挑戦

21日、SDGsの教育目標「すべての人に質の高い教育を」をどう実現するか、本学も加盟しているアジア太平洋環境大学院ネットワーク(ProSPERNet)、国連大学、UNESCO、文部科学省、環境省および本学が連携して議論するシンポジウムが開催された。



オンラインで登壇したワン氏

国連大学サステイナビリティ高等研究所イノベーションと教育プログラムコーディネーターの西美紀氏が司会を務めた。冒頭、森下哲朗グローバル推進担当副学長、ProSPERNet代表のアジア工科大学ディーン、パトリック・シャルマ教授、国連大学サステイナビリティ高等研究所所長の山口のぶ氏、環境省大臣官房総合政策課環境教育推進室室長の東岡礼治氏がそれぞれ挨拶した。

東ティモールにおける国連の役割

国連の役割を議論



国連の役割を議論

11月11日には、ポスト企画「日本の開発援助はどこに向かうのか」開発協力大綱の改定を受けて」を開催した。

その他の企画

20日は「国際機関・国連Weeksの全企画の報告はウェブサイトで公開中。」

